

八尾歴史物語

三五巻

国史跡 高安千塚古墳群・上

その① 〓どんな古墳群？〓

市東部の高安山ろくに造営された高安千塚古墳群（約6万3000㎡）が、昨年3月10日、国史跡に指定されました。同古墳群は、近畿地方でも有数の大型群集墳であり、八尾市では昭和41年（1966年）、大竹にある心合寺山古墳が国史跡として指定されて以来、約50年ぶり、2件目の国史跡となります。今回は、この高安千塚古墳群がどのような古墳群なのかについて、ご紹介します。

高安千塚は、今から約1500年前、聖徳太子や物部氏、蘇我氏が歴史上に現れた6世紀に造られたもので、224基の横穴式石室から形成されています。最大の特徴は、この横穴式石室の大きさにあります。亡くなった人を納める部屋「玄室」の大きさが、通常3〜5畳程度のものが多い中、高安千塚には9畳以上の古墳が5基もあります。では、このように大きな石室はどのようにして造られたのでしょうか。それは、材料となる

石材を「修羅」という大きな木ぞりに乗せて大勢で引つ張り、周辺山ろくの谷や川から運ばれたと考えられています。修羅を使うことで、地引きでは重量の半分程度、丸太などのコロを用いれば10分の1程度の力で巨石を引くことができます。なお、修羅の実物は、藤井寺市の三ツ塚古墳から出土しています。

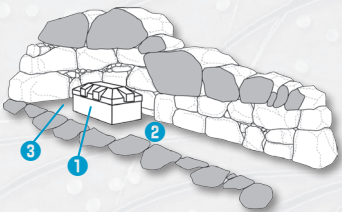
このように、大きな石室を造るには、多くの人々を動員できる経済力が必要になることから、高安千塚古墳群に葬られた人々は、非常に大きな力を持った人々であると考えられています。【続く】

☆間合せ 文化財課

TEL 924・8555

FAX 924・5593

◎石室の内部構造



- ① 石棺…亡くなった人を納める石製の棺
- ② 玄門…玄室の入口
- ③ 玄室…棺を納める部屋